生誕450年

伊達政宗の生涯をたずねて

第5回

「具足をめぐる政宗の言葉」

仙台市博物館 学芸企画室 酒井 昌一郎

伊達政宗の具足（甲冑）といえば、全身を黒色で統一し、金色の月を兜の前立に配した、仙台市博物館所蔵の黒漆五枚胴具足（重要文化財）がよく知られています。政宗が生前語った言葉を記録した史料（『木村宇右衛門覚書』・『名語集（命期集・政宗記）』）には、彼自身、この具足にたいへんなこだわりを持っていたことが記されています。今回は、具足に関する政宗の言葉をたどりつつ、彼の美学ともいうべきこだわりについて紹介します。

「具足はさね（札）のよきを本（もと）とす」

さね（札）とは、具足の最小構成単位となる小さな板です。この言葉は、具足全体の形や構成も重要かもしれないが、まずは各部品がしっかりしていることが根本となる、という意味です。ものづくりの基本として当たり前のように聞こえますが、実用性や利便性を追求するための前提を示した、重要な考え方です。ここで「具足」を「組織」、「さね」を「人」と置き換えれば、政宗の組織論にも通じる部分があるかもしれません。

重要文化財　黒漆五枚胴具足
伊達政宗所用（仙台市博物館蔵）

「人まねのこしらへ（拵え）我が手にあはぬ（合わぬ）は、用にたつまじき也」

こちらは、具足を含む実用品すべてに関する言葉。評判や流行に左右されたり、他人に薦められたからといって、実際に自分が使って具合の悪い物は結局役に立たない、ということです。これに似た内容の話が伝えられており、政宗が家臣から具足について質問された際、重い具足と軽い具足は双方とも有用な面があるが、結局は自分に合うかどうかを確かめることが大切だ、と述べたといいます。おそらく政宗の身の回りには、このように自ら手に取って実用性を検証した物が多く備えられていたのではないでしょうか。

なお、こうした検証を怠って流行の物を好む家臣に対し、政宗は厳しい目を向けました。外面ばかり華美であると皮肉を込め、「だて」という言葉を用いたこともあったようです。「だて」とは、現在では政宗を形容する場合にも用いられるようですが、彼自身が良い意味で使用した形跡は知られていません。

戦国のノウハウに、美学をプラス

以上の政宗の考え方は、そのまま現存する黒漆五枚胴具足にも反映されています。細かくなりますが、政宗の言葉を借りながらご紹介しましょう。「兜は、明珍（甲冑師）作の六十二間筋兜。胴は腕を動かしやすいよう、腋の下にあたる板を低くする。草摺は馬上でも邪魔にならない配置とする。下腹から腿を守る佩楯は、馬上・下馬ともに対応できるよう、腿の後ろでボタン留めとする。脛当は馬上で膝を守るよう、上部が大きい形にする」。このように、政宗は細部まで形式を指定しており、形には必ず理由があったのです。

政宗はさらに、実用性と見た目の両立にもこだわりました。具足に関して「見よき」・「見くる（苦）し」といった見た目の評価に関わる言葉も残されており、外見も重視していた様子がうかがわれます。実用本位でありながら、余分な装飾の無い、すっきりとした見た目を兼ね備えた具足には、こうした政宗の美学も詰まっていたのです。まさに「用の美」。戦国時代のノウハウが凝縮された、グッドデザインの具足と言えます。

改めて黒漆五枚胴具足をご覧いただく際には、外面だけの「だて」ではなく、実をともなった「伊達」なあり方を感じていただければと思います。

※本稿では仙台市博物館の学術研究機関たる立場から歴史上の人物名に敬称を付しておりません。

企画展
伊達な優品勢ぞろい Part II
―この10年の新収蔵品―
6月4日（日）まで 好評開催中
※期間中、展示替えを行います。
前期：4月21日（金）～5月14日（日）、後期：5月16日（火）～6月4日（日）

2007年以降に収蔵した絵画や書状、甲冑、陶磁器などバラエティに富んだ仙台市博物館の新たな優品の数々を紹介します。

観覧料：常設展料金でご覧いただけます。
一般・大学生：460円（360円）
高校生　：230円（180円）
小・中学生　：110円（90円）
※（　）内は30名以上の団体料金
◇休館日：毎週月曜日
◇開館時間：9時～16時45分
（入館は16時15分まで）

[左]仙台領分名所手鑑のうち「小鶴池」伊達宗村書・狩野典信筆（後期展示）、[右]染付牡丹蛸唐草らっきょう徳利（通期展示）いずれも仙台市博物館蔵

仙台市博物館 SENDAI CITY MUSEUM
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉▶ツイッター @sendai_shihaku
TEL:022-225-3074
仙台市博物館 検索